

Title	恩師神戸先生を悼む
Author(s)	大谷, 政敬
Citation	経済論叢 (1959), 84(6): 487-488
Issue Date	1959-12
URL	http://dx.doi.org/10.14989/132713
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

經濟論叢

第(八十四)卷 第六號

故名誉教授神戸正雄博士遺影および筆蹟・原稿

統計学=社会科学的認識手段論の 問題点.....大 橋 隆 憲	1
資本主義の運動法則における 論理的なものと歴史的なもの(二).....吉 村 達 次	17
急速税務減価償却をめぐる 所得税会計の保守主義.....高 寺 貞 男	37
ヘンリ・ジョージについての一考察.....北 沢 康 男	55
ソースタイン・ヴェブレンに関する 一研究.....中 山 大	68
神戸正雄先生による 再保険特約方式の輸入.....佐 波 宣 平	85
記 事	
神戸先生御逝去	91
追 憶 文	96

新 村 出	井 藤 半 弥	本 庄 榮 治 郎	小 島 昌 太 郎
石 川 興 二	蟻 川 虎 三	大 谷 政 敬	小 山 田 小 七
堀 江 保 藏	島 恭 彦	松 井 清	

昭和三十四年十二月

京 都 大 學 經 濟 學 會

恩師神戸先生を悼む

大谷 政敬

去る十月十六日の夕方偶然ラジオのスイッチを入れるとやがて七時のニュースが流れてきた。ところが意外にも、先生の御逝去のよしを耳にした。余りの突然の報らせにしばし、棒立ちになった。あるいは間違いいではないかと思つて家内は放送局に電話で問い合せたが、先生の世界のしらせは確かであつた。ああ先生は死なれたのか、この七月廿二日の午後、私が東京よりの帰途、御宅をお訪ねした時は、いつもの温顔と巨軀で出てこられ、奥さんが、少し熱があるのだとおしやつたのを耳にして、先生どうかおやすみになつて下さいと言つて、臥床のまま東京の模様や何やかや御話して、先生もウンウンと御機嫌よく返事され何時もの先生とお變りの点は見受けられなかつた。十月には財政学会で上阪しますからまたその時御伺いたしますと御約束して御別れた。

これが今となつては生前の先生の最後の思い出となつてしまつたのである。

私が大学院で財政学を研究することになって、先生に親しく接するようになったのは、昭和三年三月からであつたから、数えると三十余年となる。

先生はどちらかというど無口な方で、そして決してこうせよとは言われなかつた。ただ大学院に入つて間もなきころ、君の文章はむづかしい、文章なり思想は一応自分で消化して、自分のものとして表現しなければいけないと言われたことがただ一度ある。この一言は胸にこたえ現在にいたるまで、金科王条としてゐる。先生は黙々として、人間の話を聞かれるのが常であるが、人生の体験は深く、処世についての解決の道に困つた時など、常人を超えたほとんど神の心鏡でないと伺えない言葉で訓されたことが二三回あつて、いまなお心の灯となつてゐる。

先生の御家柄は神職で私の父も神職の出で、幼年時代は神職の環境に育つた關係か、なんとなく先生の風貌に引きつけられる思いがした。

先生には、二男一女の御家族であつたが、つぎつぎになくなつた。長男の正一さんは、先生と同じ財政学を研究され、東大の助教援であつた当時、さぞ先生は御満足のこととひそかに御喜びしてゐたのであつたが、戦争はこの正一さんを戦死させた。ただ現在血縁として残された方は、お孫さんの廿七歳の男子があるのみと聞いている。洵に先生の悲しみ断腸の思いであつたことと想う。

追　憶　文

先生は永年京大経済学部で研究と育英にあたられ、経済学部関係者は凡て弟子のような心境でいられたことは私は身をもつて体験している。肉親のつぎつぎの御不幸は、ますます経済学部への愛着を増して行かれたことと思う。

奥様の御話しによると、先生の誕生日に京大の先生方々と会食するのが唯一の楽しみであったとのことである。

先生臨終にあたり、もっとも愛着されていた経済学部の人々とお別れを望まれたことは偶然ではない。

「嗚呼！先生十月十八日経済学部では盛大な告別式が行われました。私は行けなかったのですが家内が参列いたしました。私は十一月二日お宅で御霊前に御冥福を祈り、奥様から告別式当日のお写真ならびにテープレコードで当時の模様を審らかに伺いました。どうか安らかに永遠の旅路について下さい。

合掌。」（三四・一一・六）